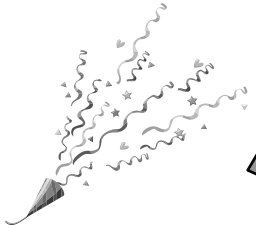
第３６回
中区明るい選挙推進作文コンクール



入賞作品集

第 36 回　中区明るい選挙推進作文コンクール

「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生Ａ部門（１～３年生）に２６１作品、小学生Ｂ部門（４～６年生）に４７７作品、中学生部門に２００作品、合計９３８作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区長により審査され、各部門において金賞１名、銀賞２名、銅賞３名、合計１８の優秀作品が選ばれました。

■小学生Ａ部門（１～３年生）
テーマ　「わたしのまちのすきなところ」

■小学生Ｂ部門（４～６年生）
テーマ　「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門
テーマ　「選挙について考える」

入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています
http://www.city.yokohama.lg.jp/naka/service/living/election/meisui/

目　次

― 小学生Ａ部門（一～三年生）―

・**中区長賞（金賞）**
まほうにかけられる商店がい　大鳥小学校　三年　佐々木　陽向…1
・**銀賞**
きれいになった港の見える丘公園　北方小学校　三年　星野　百々子…2
ぼくのまち　間門小学校　二年　野口　貴広…3
・**銅賞**
わたしの好きな町　間門小学校　二年　中村　葵…4
町を大切にする気持ち　間門小学校　三年　池田　有杏…5
わたしのまちのすきなところ　大鳥小学校　三年　宮井　萌歌…6

― 小学生Ｂ部門（四～六年生）―

・**中区選挙管理委員会委員長賞（金賞）**
おじいちゃんおばあちゃんのえ顔の見れる町　大鳥小学校　四年　徳山　優太…7
・**銀賞**
「あいさつ」の力　北方小学校　六年　宮川　尚太朗…8
人と人とのつながり　間門小学校　六年　斉藤　花音…9
・**銅賞**
植物を植えること　北方小学校　六年　細谷　彩稀…10
きちんと守ろう自転車ルール　北方小学校　六年　君島　未蘭…11
町内会の行事に参加しよう　大鳥小学校　六年　猪俣　励王…12

― 中学生部門 ―

・**中区明るい選挙推進協議会会長賞（金賞）**
外国人の政治参加を考える。　仲尾台中学校　一年　中浜　陸彩…13
・**銀賞**
私たちの選挙　仲尾台中学校　三年　岩本　由希斐…14
兄の選挙権　仲尾台中学校　三年　小田切　陽生…15
・**銅賞**
その一票で政治が変わる　横浜共立学園中学校　三年　大森　聡美…16
投票と若者の思い　港中学校　三年　野口　萌…17
自分のため？未来のため？それともご褒美のため？　港中学校　三年　古賀　千陽…18

小学生Ａ部門

☆＊＊ 中区長賞（金賞） ＊＊☆

「まほうにかけられる商店がい」

大鳥小学校　三年　佐々木　陽向

わたしがすんでいる町には、大きなスーパーもありますが、わたしは家の近くにある商店がいでお買い物をすることがすきです。

それは、ちょっととくべつな気持ちにさせてくれるまほうがあるからです。まず一つ目は、おなかの中からかけられるまほうです。たとえば、お肉屋さんのあまくてやわらかいチャーシュー。あぶら多めか少なめかえらぶことができます。それからコロッケ。たのんでからあげてくれるので、アツアツサクサクが食べられます。せいめん屋さんのうどんとラーメン。太めんと細めんがあって、わたしはもちもちの太めんが大すきです。八百屋さんのもやし。細くてシャキシャキしていておいしいです。

ほかにも、この商店がいには、ちょっととくべつな気持ちにさせてくれるおいしい物がいっぱいです。

二つ目は、心にかけられるまほうです。商店がいを通るだけで、いろんなお店から「こんにちは。」とえ顔で声をかけてくれます。

お魚屋さんのおじさんは、「おもしろい魚がいるぞ。」と見たこともない物を見せてくれたり、さわらせてくれます。ふとん屋さんのおじさんは、「今日もあついね。」とか「どこへ行ってきたの。」とか、弟と二人でおつかいに行ったときは、「二人でおつかいに行くの、すごいね。」とほめてくれました。

こんな風に商店がいは通るだけで、わたしたちにちょっととくべつな気持ちにしてくれるまほうの言葉があるのです。

わたしはお店の人と話すようになって、あいさつすると気持ちいいなと思ったので、あいさつすることが多くなりました。みんなにもまほうの言葉がたくさんとどくといいです。

わたしにいろいろなまほうをかけてくれる商店がい。これからもずっとおうえんしています。もっとたくさんの人にまほうがかかりますように。

〈講評〉

商店街の魅力が「魔法」という言葉でじょうずに表現されています。商店街はただ単に買い物をするところではなく、おいしい食べ物やお店の人たちのやさしさがここちよく体と心に入ってきて、人の気持ちを温かくする不思議な場所であることを感受性豊かに表現しています。この作品は、人と人との小さな出会いの大切さを教えられるとともに、読んだ人にも商店街へ行ってみようと「魔法をかけられる」すばらしい文章です。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「きれいになった港の見える丘公園」

北方小学校　三年　星野　百々子

去年の夏休み、私は毎朝お母さんと、犬のチョコをつれて港の見える丘公園へラジオ体そうに行きました。体そうが終わると、公園の中のバラ園へ行き、チョコは、そこであつまっているワンちゃんたちと遊びます。チョコはこわがりで、ほかの犬とはほとんど遊びません。でも、ここではなかよく遊ぶので私はその様子を見るのが楽しみでした。

夏が終わって秋になったころ、バラ園で工事が始まりラジオ体そうに行かなくなりました。大きな工事のようで、バラ園は、さくでおおわれて中が見えないようにされていました。私は中がどうなっているのか気になったので、公園の前を通ったときに、さくのすき間から中をのぞいてみました。中にあった物がたくさんこわされていて、ここでラジオ体そうができなくなるのかと心配になりました。

春になって、工事が終わり、どきどきしながら公園に行ってみました。中に入ってみたら、前よりもずっときれいになっていてびっくりしました。ポンポンみたいな花やランプみたいな花、ラッパみたいな花など見たことのない花がさいていて、絵本で見るおしろにある庭のようでした。

今年も夏休みが始まり、一年ぶりにラジオ体そうに行ってみました。公園につくと、去年と同じ場所で同じ人たちがラジオ体そうをしていておどろきました。体そうが終って、みんなが私たちのことをおぼえているかどきどきしながらバラ園だったところに行ってみました。あつまっていたワンちゃんたちは、チョコのことをおぼえていて、よってきてくれました。かい主さんたちは、「チョコちゃんひさしぶり、元気だった。」と声をかけてくれました。チョコもうれしそうでした。

その後、私たちは公園を一周して帰りました。まえしばふがあったところも工事の後、花がきれいにうえられています。みんなが喜ぶように工事をしてくれてうれしくなりました。

私はこんな港の見える丘公園が大すきです。

〈講評〉

夏休みに毎日訪れていた公園のバラ園で工事が始まり、その経過をドキドキしながら見守っていた様子から、この公園が作者にとって大切な場所であることが伝わってきます。そして、新たに生まれ変わったバラ園に喜びと感謝の気持ちをもち、この公園を訪れる人々や犬のチョコたちもこの公園を通して他者との温かなつながりをさらに強め、その場所を大切にしている思いを感じることができました。まるでその場所に読み手がいるように心を温かにしてくれる作品です。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「ぼくのまち」

間門小学校　二年　野口　貴広

ぼくは、おじいちゃんのすんでいる間門から学校へかよっています。

「近くにこうえんや学校やびょういんもたくさんあって、こんなによいところはないよ。」

と、いつもおじいちゃんは言っています。むかしは海だったので、あさりをとったりおよいだりしてあそんだと教えてくれました。

おじいちゃんのいえのそばには小さなこうえんがあって、ぼくは学校からかえるとすぐにこうえんに行きます。なぜかというと、こうえんであそんでいるとおともだちがいっぱいできてたのしいからです。でも、ぼくのいもうとのように小さい子もあそべるすなばとかがあればもっといいのになあと思います。

学校のまえのバスどおりには、春になるとさくらがいっぱいさいて、とおくからたくさんの人が見ぶつにきます。でも、あるときぼくが学校のかえりに歩いていたら、さくらの木がなん本か切ってありました。ぼくは、びっくりしておじいちゃんに知らせたら、

「もうなん十年もあそこに立っていたからつかれたんだろうな。きっとつぎのせだいにひきつぐんだよ。」

と言いました。ぼくはよくわからなかったけど、つぎにぼくが見たときは、もうあたらしいさくらの木がうえてありました。年をとったのでかわりの子どもの木とこうたいしたんだ、とぼくは思いました。子どもの木が大きくなって、さくらの花がたくさんさいたらかぞくみんなでお花見するのがたのしみです。

ぼくが大きくなったら、おじいちゃんが言ったみたいに、

「こんなよいまちはないよ。」

と、じまんしたいです。

〈講評〉

祖父からまちの昔の様子を教えてもらうこと、これは作者にとって何事にもかえられない宝物になったのではないでしょうか。桜の木の継承、祖父から作者への「まちへの思い」の継承と、まちを通して、大切なこと、もの、思いを『継承』していくことがどれほど大切なことなのかを改めて考えさせてくれました。妹への思いから、公園の改善点を考え、さらによりよいまちにしていくための提案があることも素晴らしいです。将来、作者から次の世代へとまちへの思いを継承していってほしいと願います。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「わたしの好きな町」

間門小学校　二年　中村　葵

わたしのすんでいるよこはまし中区は、春、夏、秋、冬をたのしめるばしょがたくさんあります。

春は、ほんもくにあるさんちょうこうえんでたくさんのさくらを見ながらしばふでピクニックをたのしみます。さんちょうこうえんには、桜のトンネルができてたくさんの人がとおってたのしみます。さくらのほかにはチューリップやいろいろな花がさきます。そして、みつをすいに、ちょうちょや、みつばちがやってきます。

夏は、山下公えんのしばふの上で海をながめながらおべんとうをたべます。山下公えんから出るふねにのって海風をあびるのが気もちいいです。そして、公えんでちょうちょや、こんちゅうたちをつかまえたりするのがとてもたのしいです。

秋は、ねぎししんりんこうえんで、どんぐりやまつぼっくりをひろいます。きれいにこうようしているはっぱをあつめてベッドをつくってねころびます。たいようのかおりがしてとても気もちがいいです。こうえんでは、ポニーやうまにのれて、秋のつめたい風が気もちよくかんじられます。

冬は、赤レンガそうこのスケートリンクでスケートをたのしみます。かぞくやともだちでいっしょに、スケートをしています。とくによるは、赤レンガにある大きなクリスマスツリーがとてもきれいにライトアップされています。冬ならではのイベントがたくさんあってとてもたのしいです。

わたしのすんでいる町は、しぜんもたくさんあって、かんこうするところもたくさんあります。かいがいの人にもこの町をたくさんしらせてみたいです。

〈講評〉

春、夏、秋、冬と、それぞれの季節に適した楽しみ方を、それぞれの場所で見出す感性の素晴らしさを感じました。中区という横浜市の中心地で、樹木・草花・小さな生き物・香り・風と、普段の生活の中で見落としがちなことに心を働かせ、自然の豊かさを見つけていることに感動しました。さらに、そのよさを十分に生かした環境の中で四季を満喫できることに喜びを知り、まわりの人々と共に豊かに過ごしていこうとする作者の思いは、改めて中区の素晴らしさを再認識させてくれました。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「町を大切にする気持ち」

間門小学校　三年　池田　有杏

八月十三日のお昼ごろどこからか、ふえの音がしてきました。外に出ると、大きなおみこしがありました。そしてそのおみこしの周りには、はっぴを着た人たちが、たくさんあつまっていました。

この日は、わたしがすんでいるねぎし町のおまつりでした。ふえやたいこをえんそうする人たちの中にお友だちのすがたがありました。生き生きとしていてともて楽しそうでした。

今年は三年に一度の大きなおまつりの年なので、たくさんの人がさんかしているんだよ、とおまつりのお手伝いをしていたお母さんから聞きました。

大人がかつぐ大きなおみこしと子どもがかつぐ小さなおみこしが二日間ねぎし町を周りました。その間、近所の人が水をまいたり、のみ物をくばったり、「がんばれ」と声をかけていました。赤ちゃんからお年よりまで本当にたくさんの人がおうえんをしていました。

夜のおまつりでも近所の人がたくさんあつまっていました。子どもだけではなく、大人も楽しんでいました。

このおまつりにさんかしてたくさんの人に出会いました。赤ちゃんからおとしよりまでみんな、仲がよく明るく元気な人たちばかりでした。わたしは、お父さんとお母さんと、マンションでくらしています。おじいちゃんもおばあちゃんも遠くにすんでいて、なかなかあえません。家族が多いことや家族みんなでおまつりにさんかしていることをとてもうらやましく思います。それにむかしからねぎしにすんでいる人たちが町を大切に思っていること、これからもずっとその気持ちを伝えていきたいとねがっていることを知りました。そのねがいをこの町にすむみんなで、かなえていかなければいけないんだと思いました。

〈講評〉

祭りに参加し、その様子を見つめる作者の目を通し、町の人々がお祭りを、そして町を大切にしている様子が鮮明に書かれていました。自分の町の人々がお祭りを心から楽しみ、大切にする姿を知ることにより、作者自身が心から町を好きになり、町を大切にしていこうという決意が感じられました。お祭りという体験を通し、作者が町の一員として成長していったことを実感させてくれる作品です。「町を大切にしていく」という思いを継承していこうとする作者の頼もしさも感じられました。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「わたしのまちのすきなところ」

大鳥小学校　三年　宮井　萌歌

わたしは、横浜市中区本もく満坂にすんでいます。このまちは、やさしい人がいっぱいいるので、わたしはすきです。

わたしの家のまわりには、お年よりがたくさんすんでいます。わたしには、なかよしのおばあちゃんがいます。おばあちゃんは、いつもえがおであいさつをしてくれるから、わたしも、えがおであいさつをします。いつも、おばあちゃんとあいさつをすると「あいさつは気もちいいな」と思いました。

おばあちゃんが「いってらっしゃい」と言ってくれると、「学校、がんばるぞ」と気合いが入ります。「おかえりなさい」と言ってくれると、うれしいです。おばあちゃんは、にわでお花をいっぱい育てています。たまに、お花をくれる時もあります。お花は、もってかえってきたら、いつも花びんに入れて、テーブルにかざります。お花を見て、お母さんと「きれいだね」と言ったり「お花があるとおうちが明るくなるね」と言ったりしています。

わたしが、1年生の時、おもしろいおじいちゃんがいました。いつも大鳥小学校の校門の前に立って、あいさつやジャンケンをしてくれました。おじいちゃんは、いつも明るくて、あったらいつでもジャンケンをしてくれました。わたしは、おじいちゃんとジャンケンをするのが、大すきでした。おじいちゃんは、ジャンケンが強かったので、よくまけました。でも、楽しかったです。おじいちゃんは、わたしが2年生になる時にいんたいしてしまいました。かなしかったけど家が近くなので、ときどき会えます。

夏休みのラジオ体そうの時、わたしは、ころんでしまいました。ころんで、手をすりむいて赤くなってしまった時、ラジオのじゅんびをしていたおばあちゃんが、ハンカチにほれいざいをつつんでわたしてくれました。そのとき、とてもうれしかったです。ハンカチもくれました。

わたしのまちには、親切な人が多いです。だから、わたしは、このまちが大すきです。

〈講評〉

「あいさつは気もちいいな。」と感じさせてくれたおばあちゃん、あいさつやじゃんけんをしてくれたおじいちゃん、転んだ時に手当てをしてくれたおばあちゃん、と作者のまわりには優しさに溢れた地域の方々が存在していること、その人々のやさしさをしっかりと心に受け止めている作者自身の感性の素晴らしさを感じさせてくれる作品です。まちの人々とのつながりを通して、作者の心やまちへの思いが大きく成長していることが伝わってきました。これからも、まちの素晴らしさをたくさん感じながらさらに成長してほしいと願っています。

小学生Ｂ部門

☆＊＊　中区選挙管理委員会委員長賞（金賞）　＊＊☆

「おじいちゃんおばあちゃんのえ顔の見れる町」

大鳥小学校　四年　徳山　優太

はまっ子ふれあいスクールのイベントで、老人ホームを訪問しました。老人ホームは初めてでドキドキしました。

老人ホームでぼくたちは、おまつりをやりました。たこやき屋やスーパーボールすくいなど、えん日を開いたのです。

ぼくは、しゃ的の係をやりました。しゃ的はゴムをひっぱりうつのですがおばあちゃんの手は力が入らなくひっぱる事が出来ませんでした。なのでぼくはお手伝いをしながら、しゃ的を楽しんでもらいました。

「ありがとう」やさしいえ顔でおばあちゃんは言ってくれました。そして色々話しました。

今まで近所や町内会のお年よりの方とは話したことがあったのですが、老人ホームでは初めてでした。老人ホームでは、ほとんどのおじいちゃんとおばあちゃんがつえをついていたり、車いすに乗っていました。そう言えば、しゃ的のゴムも力がなくてひっぱれなかったり、説明もゆっくり大きな声で伝えるひつようがありました。老人ホームを訪問して、はじめて気がつく事がたくさんありました。

ぼくは今まで、地いきの方やたくさんの人に助けてもらい、見守ってもらってきました。でもこれからは、ぼくにできる事がたくさんあるんだと気がつきました。それは、地いきのおじいちゃんおばあちゃんの手助けをすることです。老人ホームにはじめて入った時おじいちゃんおばあちゃんたちは、とてもうれしそうにニコニコむかえてくれました。

「かわいいね。ありがとうね。」と、何度も何度も言ってくれました。ぼくはこんなに手をたたいて笑ってくれるえ顔を大切にしたいと心から思いました。きっとつえや車いすでの生活は困る事もあるだろうし、行きたい所にも自由に行けないんだろなと思いました。だから、ぼくから一歩近づこうと思います。ぼくから声をかけたり、手助けをしていこうと思います。また老人ホームへ行けるイベントにはさんかして、おじいちゃんおばあちゃんを楽しませてあげたいです。

おじいちゃんおばあちゃんのえ顔をひとつでもふやしていけたら、きっとすてきな町になると思います。

老人ホームでおまつりをして帰る時、かき氷やジュースのプレゼントをもらいました。とてもあつい日だったので、うれしかったです。え顔でむかえてくれて、楽しんでくれて、気がつくと、おじいちゃんとおばあちゃんのえ顔でぼくの心もあたたかくなっていました。楽しんでもらいたくて一生けん命やっているぼくを、え顔で楽しんでくれたおばあちゃん。やさしさがいっぱい溢れていると幸せなんだなと思いました。お年よりがえ顔になれるように、一人でもえ顔をふやせるように、ぼくは、ぼくにできるお手伝いをがんばります。

〈講評〉

老人ホームの一日の実体験の中でお年寄りとお話をして、相手が笑顔や感動を見せてくれてうれしかったことや、自分にできることがあるんだと気付いたことが素直に書かれていました。この体験から、老人ホームだけでなく、地域のお年寄りの手助けをしたい、お年寄りの笑顔を増やしたいと考えられたことが素晴らしいです。この気持ちを持ち続け、地域のお年寄りに話しかけ、笑顔と感動の輪を広めてください。大変うれしくなる作品です。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

『あいさつ』の力

北方小学校　六年　宮川　尚太朗

「あいさつ」には大きな力がある。だから、僕は、「あいさつ」は大事にしなければならないと思っている。

毎朝学校に向かって家を出るときに、近所の人に出会う。「おはようございます」とあいさつして、いつものように「おはよう」が返ってくると、少し安心する。「おはよう」が返ってこないと、「どうかしたのかな、何があったのかな。」と少し不安になる。

僕がこのように感じるということは、相手の人もきっと同じように感じていると思う。だから、寝不足で、あいさつをするのが面倒くさいなと思うときでも、ちょっとおじぎをして、相手のことを無視したわけでも、無関心でいるわけでもないことを伝えるようにしたいと思っている。僕は元来照れ屋なので、大人の人と話をするのははずかしいのだけれども、ちょっとおじぎをすることくらいなら、いつでもできるような気がする。このように、相手のことを少しでも思いやる気持ちが大切なのだと思う。思いやりの気持ちがないと、気持ちの良いあいさつはできない。そして、「何があったのかな」と思い合うことがコミュニケーションの始まりになるのだと思う。

「あいさつ」から始まったコミュニケーションは、さらに人と人とのつながりを広げていく。僕の家の近所には、小さかった僕に会うといつも声をかけてくれたおじいさんがいた（二年前に亡くなってしまって、今はもういない。）。また、雨が降り出したのにそのことに気が付かないでせんたく物を出したままにしている家に向かって、「雨が降ってきましたよ」と声をかけるおばさんがいる。どこか旅行にでかけるようなときに、わざわざ「留守にしますがよろしくお願いします。」、と伝えに来てくれるおばさんもいる。そのおばさんは、旅行から帰って来た時には「戻りました。」、とお土産を持って来てくれることも多く、そのお土産を、僕は実はとても楽しみにしている。このような近所付き合い、近所のコミュニケーションは、今住んでいる人たちだけでなく、そのおじいさん、おばあさんの世代から続けられてきたことだと思う。そして、住んでいる人たちが人と人とのつながりを大事にしてくれているから、僕たちはこの町で安心して、気持ちよく暮らすことができるのだと感じている。

夏休みが始まる前に参議院議員の選挙があった。父母の話を聞くと、候補者は、人々がより良い暮らしをできるように、公約という様々な約束をする（でもその約束はなかなか守られない）という。僕は、道路や公園、住宅を作ることは、人々がより良い暮らしをすることにつながるとは思うけれども、住んでいる町が、安心して気持ちよく暮らせる町であることが、もっと大切だと思う。「あいさつ」をしてコミュニケーションを広げていけば、町は暮らしやすくなる。だから、「あいさつ」には大きな力があるのだと僕は思う。

〈講評〉

実際に自分が心地よいと感じている、近所の方々とのコミュニケーションのエピソードが、読み手の心も温かくしてくれます。道路や公園、住宅を作るよりも、コミュニケーションを広げることこそ「安心して気持ちよく暮らせる町」になるという強い思いが感じられます。自分の身近な出来事から、町全体のことに思いを広げている様子が、これからの未来を創る人として、とても頼もしく思います。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「人と人とのつながり」

間門小学校　六年　斉藤　花音

より良い町を作るために必要なことは、人と人とのつながりが大切だと思います。

「花音ちゃん、知ってる？本牧市民公園に三十年から五十年に一度しか咲かないランの花が明後日まで咲いているのよ。開花後は、根元の部分までかれてしまうから、明後日にはかり取られるみたいなの。もし時間があったら、行ってみなさい。」

と習字の大島先生から教えて頂きました。

さっそく、家に帰り、家族に話すと、明日行ってみようということになりました。初めて見た「アオノリュウゼツラン」はとても大きく、青い空に向かって大きくくきが伸び、先端に花が咲いていました。日本の気候風土では、三十年から五十年に一度しか開花しないため、海外では「センチュリープラント」と呼ばれているそうです。ということは、生きている間に一度から二度、運がよければ三度しか見れない貴重な花だったのです。大島先生は、こうもおっしゃっていました。

「みんな知らないみたいで、老人しか見に来ないのよ。」確かに、最終日だというのに私が見に行った時は誰もいませんでした。もう少し早く知っていれば、もっとたくさんの人に伝えることができたと思います。今回は、時間がなく残念でしたが、大島先生から私へ、私から家族へとつながり、貴重な花を見ることができました。私も家族も心があたたかくなりました。このように、人と人とのつながりが心を豊かにし、笑顔でいっぱいの町へとなっていくのではないでしょうか。

人と人とのつながりといえば、私たちの学校には水族館があります。水族館をいじするために、たくさんの人々が協力してくれています。年に一度行われる、タッチングプールには、たくさんのボランティアの方々、その中には、中学生や漁師さん、地域の方々がいらっしゃいます。この方々がいるからこそ、タッチングプールを行うことができるのです。

また、北海道から、アザラシのミルクちゃんが飛行機で来てくれたり、北陸の生き物が来てくれたりします。水族館の人達や先生が学校に泊りこんでくれるおかげで、私達は、海の生き物とふれ合うことができます。生き物とふれ合っている時は、子供も大人もみんな笑顔です。たくさんの人々がつながることで笑顔が生まれるのです。来年は、私も中学生になるので、ボランティアとして、参加し、みんなを笑顔にするお手伝いをしたいと思います。

最後に、今、間門小学校には、美ら海水族館から来た、アオウミガメの間美ちゃんやドチザメ、天然記念物のミヤコタナゴなどたくさんの海の生き物がいます。笑顔になるためにぜひ、一度、遊びに来て下さい。

笑顔が絶えない町になることがよりよい町になると信じて、人と人とのつながりを大切に一日一日を過ごしていきたいです。

〈講評〉

「笑顔」という言葉が実にたくさん使われています。人とつながることこそが、心を温め豊かにしてくれるということを強く思っていることが伝わってきます。習字の先生との出来事をきっかけに毎年行われる行事についても深く考え、たくさんの人のつながりの中に、自分がいることを感じることができました。「中学生になったら・・・」とありますが、人と人とのつながりを、より強くより広くしていく力に、ぜひなってくださいね。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「植物を植えること」

北方小学校　六年　細谷　彩稀

「植物を植える。」ということが、より良いまちをつくるために私たちにできることだと思います。

私は、家で朝顔や鳳仙花、風船蔓、ラベンダーなど、色々な植物を育てています。私は植物はどれも魅力的で大好きなので、植物を育てていますが、家で植物を育てている人は意外と少ないと思います。なので、私は植物が好きな人を増やして、育てる人を多くしたいです。

みなさんは、植物を植えることで、どんな良いことがあると思いますか。私は植物を植えることでより良くなることが三つあると思います。

一つ目は、犯罪の件数が減るかもしれない。ということです。以前、私はテレビで「花をたくさん〇〇街に植えたところ、犯罪の件数が〇〇％減りました。」という番組を見たことがあります。ということは、私たちのまちでも、植物を植えたら、犯罪の件数が減る可能性があるということです。

二つ目は、ゴミのポイ捨てが少なくなる。ということです。最近、私は公園や道路、海などで、よくゴミがあるのを目にします。ですが、公園でも花だんの周りは、あまりゴミを目にしません。なので、公園や道路に植物を今よりもっと植えたら、ゴミのポイ捨てが少なくなるのではないか。と思ったからです。

三つ目は、植物を植えることで笑顔が増える。ということです。一つ目に私が書いた、犯罪が減るかもしれない。というのと笑顔は関係していると思います。犯罪が少しでも減れば、私たちより小さな子供でも安心して遊べるので笑顔が増えると思うし、植物があることで、その時の気持ちも華やかになるので今のまちよりも明るくて、笑顔のあふれるようになると思います。

「植物を植える・育てる」ということは、誰にでも簡単にできて、しかも私たちのまちを明るく・きれいに・安全で・笑顔があふれるものにしてくれると思うので、本当にすごいと思います。

「植物を植える」ということが、より良いまちをつくるために私たちにできることだと思います。

〈講評〉

「植物を植えること」が「より良いまちをつくる」という発想が素敵です。また、上手に文を組み立てて、わかりやすい構成であることも特徴です。「植物を植えること」が良いことだとは何となく多くの人が思うことでしょうが、テレビで知ったことや、自分が実際に見たことを根拠にし、考えを深めていることが素晴らしいです。そしてそれが、比較的「誰にでも簡単にできる」ということも良いことですね。まちが花や緑でいっぱいになるといいです。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「きちんと守ろう自転車ルール」

北方小学校　六年　君島　未蘭

自転車、それはエコで手軽でとても便利な乗り物です。私は幼い頃、姉の自転車を借りて公園で練習し、乗れるようにはなりましたが、一度も道で走ったことがありません。数年前、自転車は車道を走らなければいけないと言われるようになり、少しこわくなって結局道で走ることがないまま今に至っています。（実際には十三歳未満は歩道を通行することが認められています。）

一歩外に出て歩いていると、必ず自転車が歩道を走っています。家と駅との往復、幼稚園、保育園への送り迎え、勤務先、学校への行き帰り、買い物。使用する理由は様々です。多くの人が早く家に帰りたい、早く目的地に着きたいと思っているからこそ、自転車に乗っているんだと思うのです。でも、もし向かっている途中で事故にあってしまったら。けがをしてしまったら、その場所に行くことすらできなくなってしまいます。

全国的に自転車に乗っている７割の人が歩道を通行しているそうです。歩道を歩いている時、後ろからベルを鳴らされたことがない人はいないでしょう。私はバス停で待っている時、スピードを出して通過する人とぶつかりそうになったことがあります。でも、歩道は歩く人のための道です。本来ならば、自転車は車道を走らなければならないはずなのに、自転車のために歩行者がよけなければいけないのはおかしいことです。

まだまだなくならないのが、車道での逆走です。これは大変危険です。母が運転する車に乗っていると、しばしば見かけます。きちんとルールを守って自転車に乗っている人にとっては、大変困ることだと思います。走るスペースが狭くなるばかりか、場合によっては一度止まらなければなりません。

これらを改善するためには、何ができるか、調べてみました。すると、神奈川県では５月を「自転車マナーアップ強化月間」として、「自転車ものれば車のなかまいり」というスローガンをかかげて、マナー向上を呼びかけていたことが分かりました。６月には横浜市が「横浜市自転車総合計画」を発表しています。はまっこ交通安全教室もその一つです。私も学校で参加し、講習受講済証「チリカ」をもらったことがあります。

このような呼びかけがあるのですから、私たち一人一人が正しい知識を持てば改善すると思うのです。交通安全教室は小学校で一度ではなく毎年行ったり、中学高校でも行ってほしいと思います。駐輪場もかなり整備が整ってきました。駐輪する人にルールの冊子を渡したり、ゴミ３Ｒの時のように各家庭に配布したりするのも効果があるかもしれません。

中区は観光客が大勢訪れるところがたくさんあります。レンタル自転車も使用できます。そんな中、住民の私たちがルールを守って自転車事故の少ない、自転車も歩行者も安心して歩くことのできる街にしていきませんか。まずは、子供の私たちが学び家で親や大人に伝え、正しい自転車の交通ルールを少しでも広めることができたらと思っています。

〈講評〉

近年自転車による事故が増えているとよく耳にしますね。「自転車に乗る人は、正しい知識を。」という強い思いがうかがえます。事故防止のための取り組みなども調べ、さらにどうすればよいかを真剣に考えている姿勢が、素晴らしいです。文中にある通り、道路を使う人は、自転車や自動車に乗っていたり歩いていたりと色々ですが、それに加えお年寄り、ベビーカーを押す人など、様々な人が通りますね。それぞれの立場を思うことが大切なのでしょうね。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「町内会の行事に参加しよう」

大鳥小学校　六年　猪俣　励王

「より良いまちをつくるために私たちにできること。」それは地域の子どもたちがもっと町内会の行事に参加することが大切だと思います。

僕の住む地域にも町内会があります。そしてこれは周りの町内会から比べてとても大きな団体だと聞きました。

僕の町内会では正月のもちつき大会から始まり、春のウォークラリー、夏休みのラジオ体操や子供縁日。秋には周りの町内会との連合運動会があり、冬のクリスマス会や年末子どもパトロール等たくさんの行事があります。

僕はこれらの行事が楽しみで毎回参加していますが、いつも気になることがこれらに参加する子どもたちが非常に少なく、それもいつも決まったメンバーであることです。

これらの行事に参加することが一番楽しいのですが、それ以外にそこで出会った地域の大人の方たちに顔や名前を憶えてもらえることによって、道ですれ違ったときに「こんにちは」など自然とあいさつが出来たり、「勉強がんばってるか？」とか声をかけてもらえることでとてもうれしい気持ちになれます。

こういう体験によって僕たちも地域の一員であるという気持ちが生まれてきます。

最近、僕の家の近所に引っ越してきたお友達がいます。最初は近所にお友達はいないし地域の事などが全く分からない様子でした。

そこで僕はラジオ体操に誘ってみました。すると同じくそこに来ていた他の子たちともすぐに仲良くなり、大人の人たちにも声をかけてもらえるようになって、とても楽しそうにしていたのが印象的でした。その子はさっそく次の行事が楽しみでならない様子だったのを見て、僕はラジオ体操に誘ってみて本当に良かったなと思いました。

これからも同じように他の子もどんどん町内会の行事に誘って楽しさを伝えてみようと思います。

町内会の行事が楽しいのは大人の人たちが裏で僕たちのことを一生懸命に考えて企画してくれているお蔭ですが、自分たちも一人でも多くのお友達を誘ってこれらの行事に参加することによって、一人一人がこの地域の一員であるという自覚をもち、より良いまちをつくるために自分たちでもなにか出来ることはないか、考え続けていくことが一番大切だと思います。

〈講評〉

自分なりに問題意識をもって考えたことをきっかけに、実際に友達をラジオ体操に誘ってみた行動力に感心しました。このように考えている小学生がいることを、地域の行事を企画されている大人の方々が知ると、とても喜ばれることでしょうね。この作文を一人でも多くの方に読んでもらえることを願います。また、「地域の一員である」と感じて暮らしているのとそうでないのとでは、気付かないほどたくさんのところで、大きな違いがあるのかもしれませんね。

中学生部門

☆＊＊ 中区明るい選挙推進協議会会長賞（金賞） ＊＊☆

「外国人の政治参加を考える。」

仲尾台中学校　一年　中浜　陸彩

“I think Mr.Obama is much better and favor for us than Mr.Romny.”

小学校三年生まで約五年間過ごした米国カリフォルニア州サンフランシスコの現地校では、四年に一度の大統領選挙の年になると、このように全校的に選挙についてのディベートが行われる。

二〇一二年にオバマ大統領が再選された時は、米国の選挙権を持たない我が家も、アジア各国や中南米から来た同級生家族と一緒に参加した地域での選挙討論が印象に残っている。

多くの移民が済むカリフォルニア州は、オバマ大統領の民主党びいきで知られている。しかし当時三年生だった僕のクラスのディベートでは、保険料を支払えずに病院さえ行けない貧しい人々が保険に加入できるようにするというオバマ氏の公約について、堂々と反対する友人もいた。「近くのかかりつけ医ではなく、遠くの総合病院に行かなければならなくなるから。」と彼がその理由を述べると、先生は「そうですね。」と言って、ホワイトボードに公平に書き足したのを覚えている。

このように、日本では議論されないようなテーマに対しても、きちんと意思表示できるように、米国では小学生の頃から積極的に政治に触れる機会が与えられているのを実感した。

有権者は、大統領を選ぶのと同時に、同性婚を認めるかどうかといった州政府の「プロポジション」の他にも、レジ袋やペットボトルを禁止にするかどうかなどの市の条例案まで、多くの投票をする必要がある。教育委員を誰にするかという投票の前には、投票権が無いにもかかわらず、ＰＴＡで父母が意見を求められる場面もあった。地域のコミュニティーを良くする為には外国人の意見も大切にする姿勢を感じた。

では、僕の生まれ育つ横浜市では外国人の政治参加はどうなっているのだろうか。全国有数の八万人以上の外国人が暮らす街、横浜。その横浜もサンフランシスコと同様に、参政権や永住権のない外国人に住民投票権は無い。しかし、要望や意見を市や国に伝える権利や、選挙運動への参加などが保障されている。また、国際交流協会やボランティア団体の取り組みもあり、行政への参加は進んでいる、という事が分かった。

米国では、一九七一年にはすでに選挙権が二十一歳から十八歳に引き下げられた。日本では、今年から選挙権が十八歳にも見直された。僕が投票できるのはもう少し先だが、今後、十八歳になる外国人が、どのような形で日本の政治に参加できるかを考えていきたい。そして、十八歳になったら、選挙権を持たない彼らの思いもその一票に込めて、必ず投票したいと思う。

〈講評〉

米国に居住していた頃に経験した、地域での選挙討論などに積極的な参加は、大変有意義でしたね。そして帰国し、外国人の現状や将来を考えるなど意義深いものがあります。制度の違いはあっても、様々な意思表示の場があることもよく調べましたね。小さな頃から選挙権がなくても地域のことや政治に関心を持つ意識や主張は民主主義の大事なことです。十八歳になったら、選挙を通してさらにグローバルな視点で頑張ってください。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「私たちの選挙」

仲尾台中学校　三年　岩本　由希斐

今年から公職選挙法が改正され、選挙権を持つことができる年齢が二十歳以上から十八歳以上に引き下げられました。私たち中学生も、あと数年で選挙に参加できるようになります。

私は「高校三年生になったとき、投票に行きますか？」と聞かれて、「はい。」と答えられる自信がありませんでした。なぜなら、今の日本の政治がどのようになっているのか、誰がどのような政策を掲げているのか、全然知らずに過ごしていたからです。「政治」と聞くと「難しそう」というイメージがあり、自分から知ろう、調べようという意欲が湧いてきませんでした。

しかし今年、受験生になって時事問題に触れることが多くなり、政治について学ぶ機会が増えました。少しずつ理解していくうちに今の日本がどのように動いているのか日本人として知っておかなければ、と思うようになりました。今は「一日一ページ新聞を読むこと」を目標に日々勉強しています。また私の中学校では年に一度、生徒会の役員を決める選挙が行われます。公示・告示や立会演説、投票を通して選挙の流れを初めて知りました。その時使用する投票箱は、毎年中区選挙管理委員会から本物をお借りしていて、実際の投票のしくみを学ぶことができました。

私は今の選挙で特に課題だと思うことがあります。それは投票率の低下です。横浜市の選挙投票率はこの六十八年間で三十パーセント以上と、大幅に低くなっています。中区の投票率も横浜市の平均を下回っている状態です。特に二十歳から二十九歳の投票率が極端に低いことが分かっています。

どうすればこの課題を解決できるのでしょうか。今までの私と同じように、政治や選挙に興味や関心を持たない子どもは多くいると思います。そんな子どもたちがその知識や関心のないまま大人になれば、選挙に行かなくなる大人が増え、投票率が下がっていく一方です。そんな将来にならないためにも、私は小・中学生の頃から政治や選挙について楽しく学べるような環境をつくり、もっともっと多くの子どもたちに関心を持ってもらうことが大切だと考えます。また選挙に興味を持った小・中学生と家族の中で選挙や政治に関する話題が増えれば、選挙に対する意識が高まり、より多くの大人が投票所に足を運ぶきっかけになると思うのです。また子どもたちも実際に投票所へ連れていってもらうなど、小さい頃から選挙に触れることで投票権を持った時も「選挙に行こう」という意志が強くなると思います。

投票は自分の意見を政治に反映できる大きな機会です。私は選挙に参加できることの素晴らしさをもっと多くの人に伝えていくべきだと考えます。そのために、まずは私が選挙や政治について学び、周りの人に発信していきたいです。

〈講評〉

受験生となり、時事問題について学ぶ中で政治について関心を持ち、実際に体験した生徒会選挙をきっかけに選挙について興味を持っていく様子が分かりやすく書かれていました。また、実際の中区の投票率を示し、どうすれば投票率が上がるのか考察されていました。投票は自分の意見を政治に反映できる大切な機会です。ぜひ、その素晴らしさを多くの人に伝えていってください。

☆＊＊ 銀賞 ＊＊☆

「兄の選挙権」

仲尾台中学校　三年　小田切　陽生

昨年、公職選挙法という法律の改正があり、これまで二十歳以上の人に与えられていた選挙権が、十九歳十八歳の人達にも与えられるようになりました。何十年ぶりの改正ということで、大きな社会的話題になったのです。このことは我が家にとっても大きな話題の一つでした。というのは、僕の兄が、今年の八月で、満二十歳になったからです。特に、今年は年初から参議院議員の改選の年ということで、兄の初めての選挙権の行使も、現実味を帯びていたからです。兄が急に大人になったように私には感じられました。

ところが、選挙が近づくと、ある問題が起きました。横浜市の選挙管理委員会から来た用紙は、不在投票や直接投票にしても選挙権を持っている人が、住所の登録をしている投票所に直に行って投票すると記載してありました。しかし現在兄は、京都の大学に在学中で寮生活をしています。投票するために帰省できたら良いのですが、出来ないかもしれないのです。そこで、祖父が色々と調べたところ選挙管理員会に、兄の現住所を添えて投票用紙を送ると、兄が現在住んでいる住所で投票ができるように手配してもらえることがわかりました。このような経緯をたどって兄の初めての選挙が行使される予定でした。けれども、不慣れな滞在先ということで、結局、兄は選挙に行けず、残念なことになりました。

この経緯を傍で見ていた僕は、選挙の行使というのは、複雑で大変なことだと心の中で思いました。それだけ一票の重みがあるとのことかもしれません。この時の参議院議員選挙の全体投票率は、五四・七％で新しく参加した十八歳、十九歳の投票率は四五・五五％ということでした。この数値がどういう意味を持つのか僕には判断できないですが、二人に一人しか投票しないというのは、良くないように思います。それには兄のケースの様な投票の方法が難しいということもあるのではないでしょうか？国民の生活体系は千差万別であります。だからと言って全ての人々に合わせた選挙方法というのは無理ですが、なるべく容易に選挙が行使できるようになると良いと思います。

今回の参議院選挙では、期日前投票が七六％も増えたと言われています。これは、期日前投票所数の増加という対策がとられた成果であり、さらに兄などの場合の人にも、より投票しやすい方法が行われると良いと思いました。同時に、投票する人々も選挙のし組みを、きちんと知るべきだと考えました。近い将来、３年後には、僕も当事者となります。それまでには、この経験を生かして選挙に目を向け備えておこうと実感しました。又、この様な人々を助けるためにも、広く多く、選挙管理のしくみを人々に知らせ、伝えるしくみも大切なのではないかと認識したことでした。

〈講評〉

投票率の低さを背景として、若者の政治に対しての興味や関心が低いわけではなく、投票する意志があるにも関わらず、投票する方法が複雑で投票できないという人がいるのではないか、という視点が良かったです。政治に関心を持つことはもちろんですが、同時に選挙の仕組みについても理解する必要がありますね。十八歳になるまでに、投票の仕組みについて知り、多くの人に発信してほしいと思います。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「その一票で政治が変わる」

横浜共立学園中学校　三年　大森　聡美

去年の６月、改正公職選挙法が可決され、今年の６月19日に施行されると、18歳、つまり高校３年生から投票する権利が与えられるようになりました。これにより、なんと選挙権を持つ人が約240万人も増えることになるらしいのです。そこで改めて選挙というものについて考えてみました。私が小学生の時は「クラスの代表（学級委員）」、中学生になると「生徒会長」などを決める選挙がありました。学級委員。生徒会長。これらの人たちは「この人なら私の希望する事を実現してくれるだろう」と思って多くの人が投票し、選ばれた人でした。同じ様に、投票権を与えられた大人が『政治家の仕事は「国民や地域住民が願う政策を実現すること」だ』ということをふまえて「この人に街づくりを任せたい」と選んだ自分たちのリーダーが政治家なのです。

ではなぜ、私達は選挙に参加しなければならないのでしょうか。総務省の資料で平成26年の衆議院選挙の投票率を見てみると、20代の投票率は約33％、それに比べて60代以上の投票率は約63％もあることがわかります。政治家は当選しなければ政策を実行に移せないので、より多くの国民が賛同してくれる意見を政策として掲げがちです。それゆえ若者のための政策よりも優先順位的に60代以上の人たちの意見を反映した政策が増えるのです。確かにそれは当然の事であり、もし私が政治家だったとしても、選挙に行かない若者の求める意見よりも選挙に来てくれる60代以上の求める意見を大切にすると思います。つまり、若い世代も働いて税金を国に納めているのに、若い世代のための政策がなかなか実行されないのが現状なのです。しかし、選挙法の改正により、選挙の結果に若者の意見がより多く反映されるようになりました。そのような中、選挙に行かなければ結局若者の意見が採用されず、以前と同じように高齢者の意見が多く反映される政策となってしまいます。私もはじめは選挙に自分が行って投票したところでたったの一票なのだから何もかわらないと思っていました。でも選挙に行くことで「政治について考え、自分の政治意識が高まり、世の中の色々なニュースに興味を持てるようになる。」と考えると、それはとても有意義なことであるし、政治意識が高くなって日常会話でも政治の話題が普通にできるようになれば、相手の政治意識を変えられるかもしれないのです。つまり、自分の行動が周囲の多くの人の政治意識を高め、自分の考えを伝えた相手も選挙に行くようになれば、結果的に自分の一票は10票にも100票にもなり得るのです。だからまずは自分から政治に対する意識を高く持って積極的に選挙に参加することが大事なのではないかと思います。

〈講評〉

政治に対して関心がなくても、投票に足を運ぶことが政治について考え、興味を持つきっかけになると書かれていました。ただ「興味を持つ」ということは難しいですが、「とりあえず選挙に行ってみる」ことは行動に移しやすいことのように感じます。政治に対する意識を高く持つためにも、まずは積極的に選挙に参加しようという姿勢を大切にしてください。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「投票と若者の思い」

港中学校　三年　野口　萌

今年の六月。参議院総選挙が行われた事は記憶に新しい。勿論、各政党の議席数等も重要だが、改正公職選挙法成立から、選挙権年齢が十八歳以上に引き下げられた事も非常に印象深い。投票率はどうだったのだろう。

総務省の発表では、十八歳と十九歳で四十五・五パーセント。二十代では、三十三・四パーセント。どちらも投票者全体の投票率を下回る結果となった。最近、若者の投票率の低下が話題になっているが、それはどうしてだろう？調べてみると、主に二つの理由が多い事が分かった。

一つは、「選挙の具体的な事がよく分からない。」という理由だ。ある世論調査では、「選挙で投票する事に戸惑いや不安がありますか。」という質問に対して、あると答えた人が四十九パーセント。その訳として、「政治や選挙についてよく分からないから。」と答えた人が六十六パーセントもいる事が分かった。確かに私も、公民の時間にそれらについて学習はしたが、「何処で、どの様にして投票が行われているのか？」等と疑問に思う事が多い。具体的な事が不透明に感じられる。そこで、若者に向け「選挙マニュアル本」なる物があったら良いなと思う。例えば、選挙の仕組みは勿論、実際に投票する時の手順をまとめたリポート、各地域の投票所の場所案内等を記した地図、よく出る質問等を掲載する。これを投票所・市区町村の役所・各家庭に投票所入場券と共に配付する。「選挙に行きたいけど、初めてで勝手が分からない。」「この近所の投票所はどこだろう。」こういった具体的な疑問にきっと、答えられるだろう。

もう一つは、「選挙に参加はしたいが、物理的に難しい。」という意見だ。大体の投票所では午前七時に開き、午後八時に閉じられる。また、会場は、公共施設等の限られた場所である。社会人は常に多忙だ。用事や仕事の都合で投票出来なかったり、投票所へ足を運ぶ事を尻込みしてしまうケースも多く、期日前投票を利用する人も増えている。その解決策として有効と言われている「インターネット投票」。セキュリティー面やハッキング対策用にかかるコスト等、様々な問題を抱えている為、日本では行われていないが、最大の魅力は容易に投票出来る所である。実際にエストニア、アメリカの一部と言った場所では、導入した所、何と六倍の投票率を記録したそうだ。ＩＴ化が進み、インターネットが身近な物である現代社会では効果が期待されるのではないか。「選挙マニュアル本」も「インターネット投票」もいつか実現されたら嬉しいと思う。

国の少子高齢化が進む現在、未来を担う若者の一票はとても貴重ではないだろうか。私は選挙権を得られる迄に三年ある。それ迄にニュースや学校で選挙や政治についてしっかり学び理解を深めたい。それが、大切な一票を投票する為に、私に今、出来る事だから。

〈講評〉

若者は政治に関心がないのではなく、分からないからこそ投票に行けない、物理的に投票に行くことが難しいという意見が書かれています。社会が今以上に学生に対し、政治について語っていく必要があると考えさせられました。これからの未来を担う若者の代表として、一票の重みを感じながら政治や選挙について考えを深めていってほしいと思います。

☆＊＊ 銅賞 ＊＊☆

「自分のため？未来のため？それともご褒美のため？」

港中学校　三年　古賀　千陽

「選挙？別にそんなの行ったって何も変わらないし。」「せっかくのバイトの休みの日、自分のために使いたい。」そんな声を聞いた、二〇一六年の参院選。この選挙から十八・十九歳の人も投票できるようになった。

今回の参院選は、投票を済ませた人がプレゼントや割引を受けられる「ご褒美」サービスが行われた。投票所だけでなく、商店街や観光地にも若者を呼び込むための作戦だという。「投票済証」を示すと、「センキョ割」でメロンパンアイスが半額になったり、テーマパークの入場料が何割か安くなったりする。ポテチなどをその場で配った投票所もあったという。しかし、選挙とは「ご褒美」のために行くものなのだろうか。

選挙に関心がない若者。選挙よりも遊びに行くのが大事な若者。そんな若者を投票所に呼び込むために行われた「ご褒美」サービス。そのサービスを行うということは、大人達が「こうでもしないと若者は選挙に来ない。」と心のどこかで思っているからではないだろうか。確かに、私も投票前にそのサービスを聞いたときはそうかもしれないなと思った。しかし、投票が終わってみればそのサービスがあるにもかかわらず、選挙へ行った若者は少なかった。もちろん選挙へ行かなかった若者に非があるのだが、大人にも非はあると私は思う。今の子供は選挙に関わる機会が少なすぎるのだ。それは大人の責任でもある。昔は子供も一緒に選挙へ連れて行き、選挙を身近に感じさせるのも大人の役目だったと母が言っていた。必ずしも若者が悪いと責めることはできないのだ。

私は小さい頃、選挙が大好きだった。父と母と投票へ行くと、必ず周りの大人が褒めてくれたからだ。それに、投票をしている大人達が幼い私の目にかっこよく見えたからだ。「私も大きくなったら銀色の大きいポストに青い紙を入れるんだ！」と父と母によくそう言っていたそうだ。これが、選挙を身近なものにし、あこがれを持たせ大きくなったら投票するという刷り込みである。この刷り込みが大事なのだが、今は親が選挙に行かない、という家も多くある。そうすると刷り込みされていない子供が増えてくる。つまり、親が行かないと子供も行かないが、親が行けば子供も行くように育つということだ。

選挙は、義務ではなく権利だ。権利なら行くも行かないも自由なのではと思うかもしれないが、権利は行使しなければ持っていなかったのと同じことになってしまう。権利は使うために存在するのだ。大人は子供と未来と自分のために投票し、子供は大人と未来と自分のために投票するのである。これを行うには、大人が子供に刷り込みをし、選挙が大事なものだと認識させるのが、大切なのだ。決してご褒美のために投票へ行く人間になってはならない。投票は何のためにするのか。それはもちろん、人のため、未来のため、何より自分のためである。

〈講評〉

何のために選挙に行くのか、この問いは多くの若者が思っているものだと思います。選挙に行くことの利点が「ご褒美がもらえるから」と捉えてしまうと本来の投票し選挙をする意味からずれてしまいます。若者が「選挙の意味」を理解し、投票に行き続けるためにも、大人たちが見本となって権利を行使する姿を見せていかなければならないですね。

審査をふりかえって

「中区明るい選挙推進作文コンクール」は平成二十八年度で第三十六回目を迎えました。本年度も区内の小中学校から九百編を超える作文の応募があり、中区の小中学生にとって夏休みの恒例行事として根付いてきた感があります。

小学生のテーマは、「わたしのまちのすきなところ」と「より良いまちをつくるために私たちにできること」でした。自分の住んでいる町の魅力やそこに住んでいる人たちとのふれあいなどを素直な心で情感豊かに書かれた作品が多かったです。

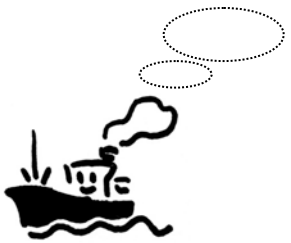
中学生のテーマは、「選挙について考える」でした。本年度は昨年六月に改正公職選挙法が可決されたことにともない十八歳から投票する権利を与えられたことに関する作文が大変多かったです。

小学生Ａ部門では自分が住んでいるまちの好きなところが具体的に書かれている作品が多かったです。その中でもその根底にあるそこに住んでいる人とのつながりを感じ取れる素晴らしい作品が印象に残りました。

小学生Ｂ部門では周りの人たちとのつながりだけでなく、その中で自分が今できることを自分なりに考えて具体的にまとめられている作品が多く、大変頼もしく思いました。

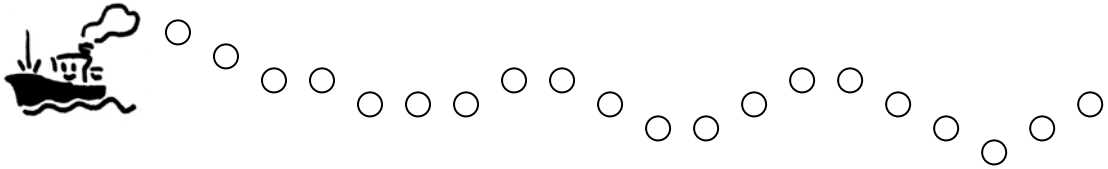
中学生部門では十八歳から選挙権を持つことに対する作品が大半を占め、そのことへの関心の高さがうかがわれました。その中でも選挙権を持つことの責任の重さや大切さを考えて、根拠を明確にまとめられた作品に頼もしさを感じました。

「中区明るい選挙推進作文コンクール」を通して、選挙や自分のまちに対してしっかりと考える力を中区の児童・生徒が着実に身につけてきていることをあらためて実感しました。



■作品の選考・講評■

横浜市立元街小学校教諭	穴澤　直美
横浜市立間門小学校教諭	川田　いづみ
横浜市立仲尾台中学校教諭	中村　豊
横浜市立大鳥中学校教諭	北浦　翔子
横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	前川　友三
横浜市中区選挙管理委員会委員長	谷　昭夫
横浜市中区長	三上　章彦



第３６回
中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集
平成２９年２月発行
発行
中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所
〒２３１－００２１
横浜市中区日本大通３５番地
ＴＥＬ　０４５－２２４－８１１６
ＦＡＸ　０４５－２２４－８１０９

明(あか)るい選挙(せんきょ)キャラクター
選挙(せんきょ)のめいすいくん

横浜市中区(よこはましなかく)のマスコット
スウィンギー

横浜市選挙(よこはましせんきょ)のマスコット
イコットちゃん